

今、湛山翁を偲んで

國弘正雄（英国エジンバラ大学特任客員教授）

『自由思想』というささやかな不定期刊行物がある。

財団法人石橋湛山記念財団の発行になり、幸い小生、故石橋湛一さんのご好意で、毎度恵送たまわっている。小生にとっては^{かたじけ}なにかぎりの刊行物である。

故湛一さんとは、氏が主筆をつとめていられた『東洋経済新報』誌に何度か物を書かせていただいたご縁で、何回か本社にもお邪魔したほか、ご自宅にも伺った。

湛一さんの厳父がかの石橋湛山翁であることは申し述べるまでもなからう。明治末年から大正・昭和の三代にわたり、この国の政治・経済・社会・文化という広い分野で、評論家・思想家・警世家として活躍された。小生がもっとも尊敬し、仰ぎ見る存在であった。翁が僅か2ヶ月の余にすぎなかったとはいえ総理の印綬を帯びられたときのことを、いまもありありと憶いおこす。あの、二三位連合という歴史に残る逆転劇とともにだ。

自民党の総裁選挙の折、一位になったのがかの岸信介、二位が湛山翁、そして三位が石井光次郎氏（シャンソン歌手として名を成した好子さんの父君）で、二三位を組んで岸氏を破り、総理総裁となった。

小生が山口県熊毛郡田布施町の同郷の岸に対する、近親憎悪にも似たアンチの思いとは裏腹に、翁への篤い思い入れがあった。この変則きわまりない連合には大好感を発し、石橋内閣の登場には拍手喝采を惜しまなかった。

戦中焼跡派の小生にとっては、東条内閣の

商工大臣兼軍需政務次官として、開戦の詔勅に署名したのみならず、敗戦後、巣鴨から釈放されるやすぐに米大使館に赴き、ときのマーフィー、マッカーサー（二人とも後に大使になった）両外交官との間に、かなりいかがわしい取り引きを行なった岸信介なる男は、卑劣きわまりない、大A級戦犯に他ならず、同郷人で、同じ浄土宗寺院の檀家総代の彼は許しがたい存在だった。血縁のつながりがあるだけに、その思いには強烈なものがあつた。

時あたかもテレビが漸く普及しはじめた頃ということもあり、この総裁選の折の息詰まるニュースには喰いいたものだった。

その小生、のちに当時の社会党（現社民党）から全国の比例で立候補し、一期6年を参議院議員として国政に参加した。が、自民党の少数派とむしろ縁が深く、三木武夫元総理、宇都宮徳馬代議士（後に参議院議員）、それに井出一太郎元官房長官とは、公私の両面で近しく付き合わせていただいた。

三木さんのもとでは外務大臣秘書官、環境庁特別顧問、外務省参与と、長年の心友筑紫哲也がさるところに書いていてくれたように、いわば「影の形に沿った」二人組であった。

宇都宮徳馬さんとは軍縮がらみでかわいがっていただいた。いま「宇都宮徳馬の人とその思想」という連載をさせてもらっているのは、彼が設立した季刊『軍縮平和市民』誌においてだが、彼も三木さん同様、誰をもっとも尊敬しているかの問いに瞬時のためらいもなく、石橋湛山翁を挙げた。同じことは、

歌人としても高名で、ある年には宮中で召人役をつとめた井出一太郎さんにも当てはまる。

直木賞作家として著名な井出孫六さんは、一太郎大人の末弟で、年齢差の大きさもあり「自分にはおやじがふたりいたようなもの」と往事を懐かしんでいる。孫六さんには岩波ブックレットの510号に『石橋湛山と小国主義』と題した翁にピタリの小冊子がある。

この三者とも、それぞれ個性のつよい人ではあったが、岸信介を祖父として尊敬してやまぬ旨を公言して憚らぬ現首相に対し、どのような評価を下しているか、泉下に訊ねたい気がしてならない。そして現首相ときたら、その姓を受け継いだ父方の祖父、安倍寛さんについては、まったく黙して語らない。

このあたりについては、5月14日号の毎日新聞の夕刊が「届かぬおじいさまの声」、「戦争回避訴えた安倍首相の祖父」と大見出しを翻して、「護憲・三木さん悔し」と題した三木未亡人についての記事を掲げている。三木・安倍寛両紙の写真とともにだ。

これは同紙平川哲也記者の手になる秀逸な記事で、睦子未亡人が平成4年、護憲を求める「九条の会」の呼びかけ人となった点に触れ、それも「二人の遺志を継承しようと思つてのことだが、力及ばず改憲への道のりが作られてしまった」として安倍首相には二人——『安倍寛さんと三木武夫の声が聞こえなかったようね』とこの夏に90歳を迎える声に、悔しさがにじんだ』と結んでいる。

この九条の会は三木夫人のほか、加藤周一、奥平康弘、井上ひさし、大江健三郎、鶴見俊輔、梅原猛、それに小生とたまたま同年生まれで親しくさせてもらっている女流作家・澤

地久枝も加わっている。なかなかもって豪壮な顔ぶれである。

なお安倍寛さんについて平川記者は、旧帝国議会の元衆議院議員で、1942年の翼賛選挙では、翼賛政治体制協議会の推薦を受けずに当選し、同じく非推薦で議席を得た三木元首相とともに、軍部主導の国会を批判した、と書いている。

握り飯とわらじ履きが、寛さんの思い出となっている、と平川記事。寛さんは戦争回避などを訴える街頭演説を終えると、東京都豊島区の三木家に寄り、「腹が減った」とよく言った。睦子さん手製の握り飯をほおぼると、すぐにわらじを履き直し、また演説に出かけた。寛さんには特高警察の監視が絶えなかった。「行って来る」と、毅然と言ひ残し、街に消える幅広の肩が忘れられないという。

ただこの平川記事は「寛さんは新憲法の公布を見ることなく51歳で病死した」と伝える。他方で、自民党に合流した三木元首相は睦子さんにその真意を訊ねられると、「僕が自民党に残らなければ戦争放棄と定めた憲法九条はなくなってしまう」と話したという。

この憲法九条については、何でいつまでもパパは自民党なんぞにいるのよ、という夫人の詰問調に対し、ママはそういうけど、僕がいなくなったら九条なんかやめてしまうよ、と三木さんが忘れていた姿を、小生は幾度となく覚えており、現にその旨を『操守ある保守政治家 三木武夫』と題したたちばな出版の小著（2005年11月21日初版）の30ページほかに録している。

あの何気ない夫婦の会話は三木の本質と、彼が自民党という政党に寄せていた本質的な

憂惧の深さを物語っている。

さてこの辺で、話柄を石橋湛山翁に戻す。翁についてはいくつもの良書があり、何人もの専門家がおられる。ただここでは人口に膾炙した執筆者3人をとくに挙げ、夫々の代表作を一冊づつ紹介して小生の責めをふせがせていただく。何れも現存するライターで、それぞれ高名な存在ばかりである。

一つは、すでに岩波ブックレットとして紹介した『石橋湛山と小国主義』で、井出孫六さんが著者である。同氏は三木内閣の官房長官をつとめ宮内歌会はじめの召人の役をも果たした井出一太郎氏の末弟である。二人のおやじとの挿話はすでに紹介した。

孫六氏は、湛山翁が組閣時の疲労が重なって病いに倒れ、僅か2ヶ月で辞意を固めた経緯について、ジャーナリズムこそ悲劇の宰相とその引き際をたたえはしたが、悲運に遭遇したのは一人石橋湛山ではなく、日本全体が悲運に遭遇したと私が考えるようになったのは、もっとずっとあとになってからだ、と若き日の自分をふりかえっている。

石橋翁が日中国交回復を自らの使命とし、政策課題の中心にすえ、世論もそれを期待していたはずであった、と井出はいう。ただ石橋辞任にともない、岸信介が総理の座に就いたとき、それはるか後景に退いてゆき、安保改定のための対米交渉が急テンポで進んだ。15年戦争の歴史的精算の途がここに閉ざされてしまったという点で、石橋内閣の悲運は、この国の悲運に通じるといえぬだろうか、ともいう。

そして言論人石橋湛山の全容を、わたしが知ることができたのは、石橋湛山全集の刊行が実現してからのことだった、と井出。15巻

にも及ぶ全集を持つ総理大臣は、石橋をおいで他にはない。恐らく、世界にもそのような存在は稀にちがいない。その全集を読みすすみなながら、15年戦争の歴史の清算人は、1921年の7月23日号の『東洋経済新報』の社説欄に「一切を棄つるの覚悟」と題した論文を認め、ついで7月30日から3週にわたって「大日本主義の幻想」が社説欄を飾ることになる。そしてときあたかも行われていたワシントン軍縮会議を有利に導く唯一の策は「総てを棄て掛るの覚悟」にありと説く。

では石橋翁がいう「総て」とは何か。

「例えば満州を棄てる。山東を棄てる。その他支那（ママ）が我が国から受けつつありと考える一切の圧迫を棄てる。その結果どうなるか。また例えば朝鮮に、台湾に自由を許す。その結果どうなるか。英国にせよ、米国にせよ、非常の苦境に陥るだろう。何となれば彼らは日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的位地を保つを得ぬに至るからである」

さらにこの裂迫の気魂をこめた文言はつづく。

「彼らは日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界における道徳的位地を保ち得ぬに至るからである。その時には、支那を始め、世界の小弱国は一齐に我が国に向って信頼の頭を下ぐるであろう。インド、エジプト、ペルシャ、ハイチ、その他の列強属領地は、一齐に、日本の台湾、朝鮮に自由を許した如く、我にもまた自由を許せと騒ぎ立つだろう。これ実に我が国の位地を九地の底より九天の上に昇せ、英米その他をこの反対の位地に置くものではないか」

〓 湛山翁の、そして井出孫六さんの筆致は実にスムーズでよどみがなく、しかもその時空を超えた視野の広がり感銘せざるを得ない。何れにせよ、この「道徳的位地」ということばが湛山翁の政治思想の重要なキーワードとして頭に留める必要があろう。井出の説く通りである。

〓 井出を離れ、次に赴きたいのは佐高信が1994年11月に、東京経済新報社から連載を纏めるといふ形で一本にした『良日本主義の政治家』と題する一本で、ここにはいま、なぜ石橋湛山かという副題が付されている。

〓 孤高を恐れず、徒党を組まず、大衆にこびず、大衆を無視しない、「ペンダコ」のある政治家石橋湛山がいまよみがえる、という内容紹介がいかにも佐高氏らしい。この「ペンダコ」のある政治家という文言は秀逸この上ない。文筆家としても第一級だった湛山翁を、いま世に時めいている物書きが評することばとして、これにまさるものはあるまい。

〓 1994年1月22日号でスタートし、9月10日号まで、実に30回にわたって「湛山除名一小日本主義の運命」と題して連載された。そしてこの94年夏に社会党（当時）の村山富市委員長を首班とする自民・社会・さきがけ内閣が三党連立内閣として登場する。佐高はそのあとがきで「土井たか子、鯨岡兵輔、國弘正雄、田中秀征、伊東秀子と湛山に敬愛の念を抱く政治家は、いわゆる保守・革新の枠を超えて存在する」と述べ、これらの政治家が、立場によって動きの違いがあるとはいえ、誕生を望んだ内閣が村山内閣だった、と舞い収めているのはめでたい。

ただ、“最後の石橋派”を自負する宇都宮

徳馬さんは病床であって、お話を聞けなかったのは残念だった、と付言してくれているのは、わが友田中秀征にならって、湛山翁の孫弟子を自負している小生にとっては忝さなきの極みである。宇都宮さんこそはわが尊敬する師匠の貴重なお一人だからである。

〓 何れに死せよこの佐高連載を熟読していた一人として、その「冴え冴えとした筆致」には応援と共感を吝まなかった。あとがきの一番最後にこの「冴え冴えとした筆致」なる文言用いてくれた佐高さんにはいまも感謝している。あれは1994年の9月26日と録されているから、早くも13年の月日が経ってしまった。感慨なきを得ない。

佐高について、半藤一利の、これまた東洋経済新報社から1995年7月に出たその書名も『戦う石橋湛山』を取り上げさせていただく。「昭和史に異彩を放つ屈伏なき言論」とサブタイトルされている。この屈伏なきという独特の修飾語がまず小生を驚かす。かつて『操守ある保守政治家 三木武夫』を物したとき、この操守あるという修飾語に驚いた読者を著者はもったが、実はあれは小生の造語ではなく、さる高名なジャーナリストの三木評をそのまま使わせていただいたのだった。

〓 ではこの「屈伏なき」はどのようなのだろうか。

半藤氏は1930年の生まれと聞くから小生と全くの同年代、何かの折にお会いしたことが絶無とはいえぬが、氏は名だたる文藝春秋誌の編集長をつとめたことのある超有名人で、ヘボ物書きの小生の遠く及ぶところではない。

〓 それはさておき、湛山翁の剛毅果断さ、については本書の序章が「その男性的気概」とあるところに十二分に見てとれる。現に翁は

その堂々たる信念と自信とで、戦時下の昭和に『東洋経済新報』によって、一貫して自由の論調を少数意見として説きつづけたのである、とは半藤氏自身の弁である。

満州事変で“勝った勝った”と日本中が有頂天になっているときに、翁は社説「支那に対する認識」で、「支那は支那人の支那であり、日本人が満州に勢力を占めるのは、結局支那人の住地たるほかないということを考えてかからなければならない」と警告していたのである。彼は外に対する一切の帝国主義・植民地主義に、断固として反対しつづけたのだった。

戦争には一貫して批判的だったが翁は、昭和19年2月、クエゼリン島で一子を戦死させている。

「私がかねてから自由主義者であるために軍部及びその一味の者から迫害を受け、東洋経済新報も常に風前の灯火の如き危険にさらされている。しかしその社が今や一人の愛児を軍隊に捧げて殺した。」

私は自由主義者ではあるが、国家に対する反逆者ではないからである」

私は自由主義者ではあるが、国家に対する反逆者ではない—石橋湛山の生涯は正確にこの一行のなかにあった、と著者の半藤氏は涙をおさえてこのくだりにさしかかったようである。

なお湛山翁について筆を擱くにあたり、東洋経済新報社の確立者であり、石橋湛山の育成者であるばかりか、資本の自由よりも人間の自由を第一義に置く自由主義者として一貫した三浦鏡太郎翁についても触れておく。現に大日本主義と小日本主義とを対比させて、

後者を就るべしと初めに唱えたのは三浦翁であった。

石橋研究者として高名な松尾尊兌京都大学名誉教授に、三浦鏡太郎論説集として『大日本主義か小日本主義か』という著作があり、1995年11月に、これまた東洋経済新報社から上梓されている。同社創立100周年記念事業の一貫としてである。湛山について攻究する学徒は須らく一巻をもちいるべきであろう。

なお本稿がここまで来たところで、5月23日、報道は平岩外四元経団連会長の92歳での長逝を報じた。生前には何度かお目にかかった。「財界の良心」といわれた東京電力の木川田一隆氏に若年のころから引きたてられたが、小生、木川田さんとは欧州旅行に同行を求められるなど浅からぬ因縁がこれあり、そこで平岩さんを相識るはこびとはなった。

この人を小生が強烈に記憶するのは、その「強力な護憲論者」(毎日新聞評)の故にである。若かりし日に、ニューギニア作戦に招集され、117名の部隊のうち同氏を含め僅かに7人だけが生き残ったという惨憺たる経歴も加わり、平岩さんの護憲ぶりたるや徹底していた。小生も九条の会その他のからみで平岩さんには大きくお世話になったものだった。

これは湛山翁はもとより、三木・宇都宮両氏とも通底する点だった。いま天上でどのような会話が交わされているのか、いまの安倍政権下の世情や政情に大きな懸念をもたれていたということだから、さぞかしや甲論乙論がたたかわされていることだろう。